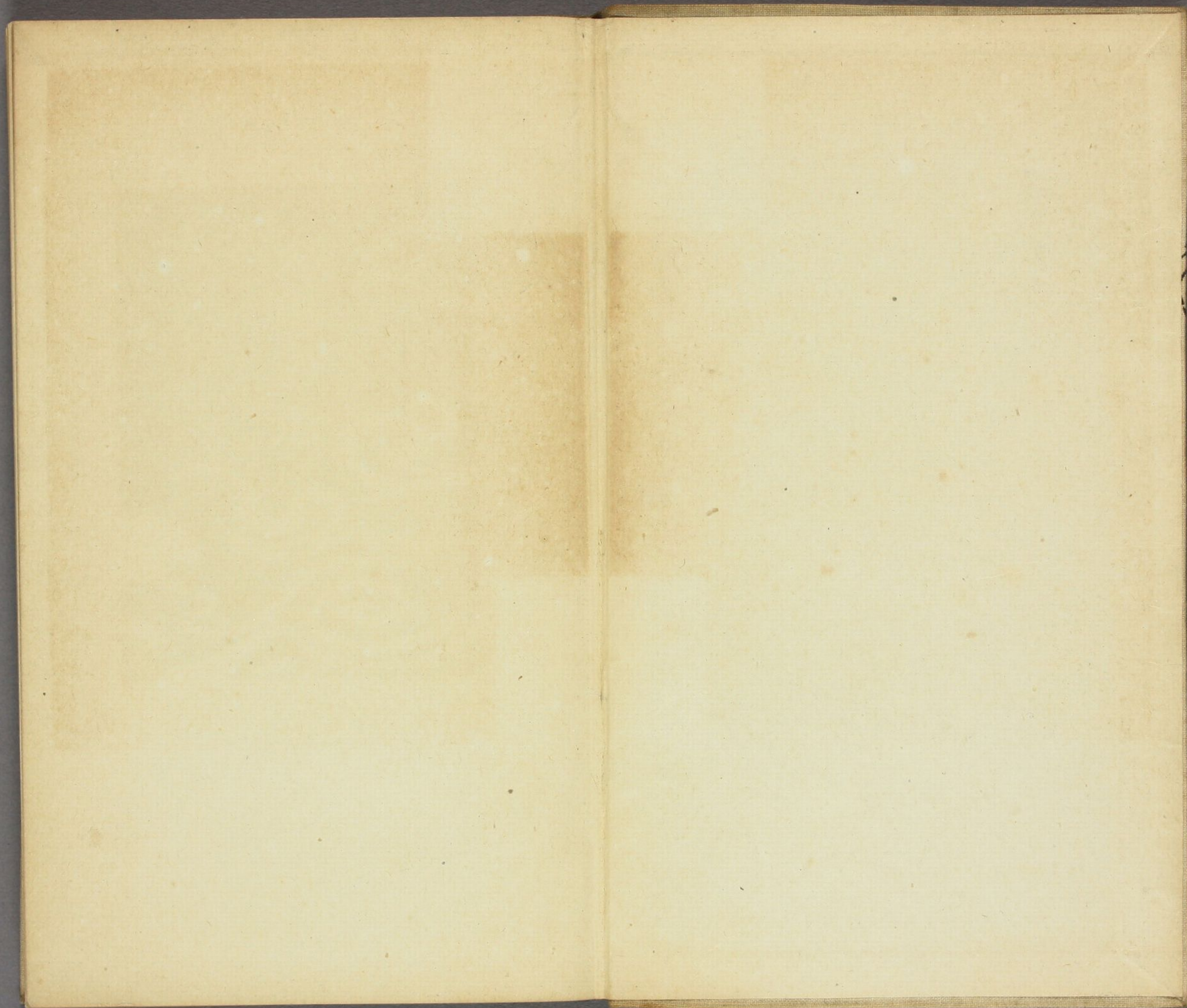


天馬の道に

土井晚翠著

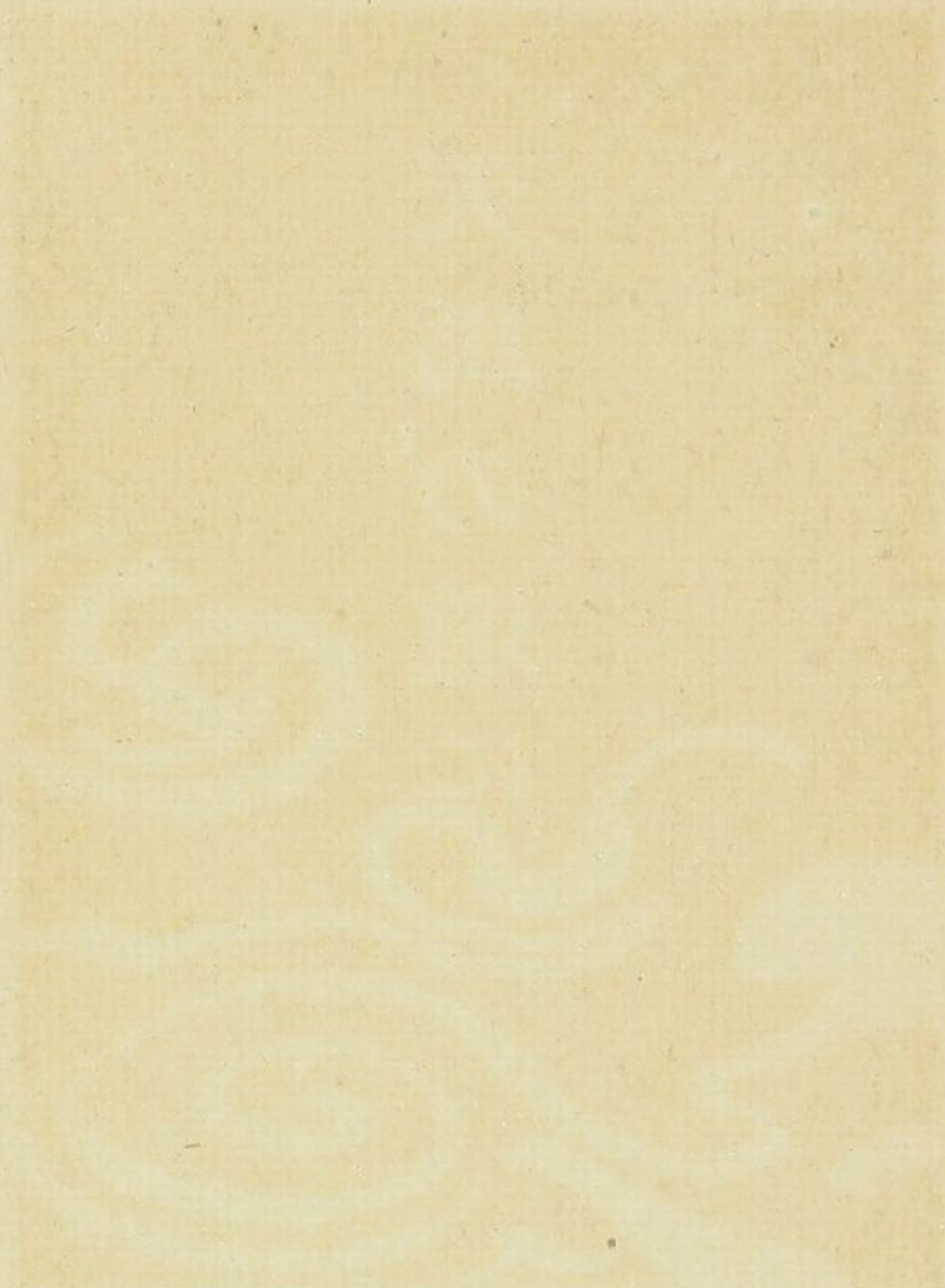
館博
刊文







著 翠 晚 井 土





はしがき

南歐の詩人が東亞飛行の壯舉を愈決定
したと聞いた大正八年の秋本篇の大體
の構想がとある一夜(九月十八日)に出來
上つた。聯想の翼の擴がるまゝ其後改
竄もし補足もしてともかくも今公けに
する形と成つた。首尾一貫の一長詩の
積りではあるが之を構成する三十六章

の各々またそれ／＼獨立の一篇として
 讀まるるも勿論差支ない。
 題名は天馬ベガサスの翼虚空を劈く其
 道を飛び來る南歐の賓客を迎ふる意を
 ほのめかしたのである。

一千九百二十年三月最後の校正を了へて

著 者

目次

次

南歐三千里	一
空の大海	四
飛鳥のあと	六
大西洋横斷	八
太平洋	一一
南歐の精華	一三
オリエン	一六

オクシデント又オリエント……………二
 時世の姿……………三七
 ダヌンチオ……………三九
 行程三千里……………四三
 おほいなる惱……………五三
 その来る時……………五八
 日本の風姿……………六三
 東亞の美術……………六九
 東亞の時局……………七九

小山鼎浦を弔ふ……………八二
 真島博士の愛兒を弔ふ……………九五
 森村翁……………一〇〇
 坂垣退助氏……………一〇五
 一つの死……………一〇九
 大戦の追想……………一一五
 狂瀾怒濤……………一二一
 民よサイレンの聲を恐れよ……………一二九
 マチイニに聴け……………一三三

悩める魂……………一三八

東方の聖經……………一四三

紺紙金泥寫經……………一四七

東方の聖經 (再び)……………一五四

大方廣佛華嚴經……………一一一

詩の大海——ダンテ……………一六七

レオナルド、ダ、キンチ……………一七三

李太白と杜少陵……………一八〇

ミクランジェロ及びラファエロ……………一八五

南歐の詩人と藝術家……………一九〇

ガプリイレ・ダヌンチオ (再び)……………一九三

註解……………二〇三

(畢)

←一 里 千 三 歐 南 ←一

月桂の緑の冠
寶劍の光を添ふる
一代の詩神の寵兒、
天來の想に驅られて
人工の翼をのばし、

南歐三千里

九天に羽敲き
白雲に駕し、
烟波夢むる地中海、
中央亞細亞の山河の固、
五天搖曳の暮の雲、
更に洞庭瀟湘のほとり
黄海の波韓山の月
千山萬水下に見て
南歐遠く三千里、

率ゐる八機一齊に
東亞縹渺の空に飛ぶか。

空の大海

たゞ一氣、靈妙の大氣の海、
 人間の目にふれずして
 人間の世をおほひなす
 無邊無限の空の海、
 しづまりては
 深淵の水の如く、
 幼兒の眠の如く、

あらびては
 英雄の狂の如く、
 蒼溟の怒濤の如く、
 渺々として鳥飛ぶにまかせ、
 浩浩として雲行くを送り、
 下界の山川草木國土其底につらね、
 有生無生森羅萬象其底にやどす、
 空の明鏡、空の大海、
 空の眩惑、空の神變。

飛鳥のあと

人間いくたび飛鳥をうらやみ、
 高く憧憬の眼をかへして、
 あるひは金色染めなす雲に
 天使天軍の飛翔を思ひ、
 あるひは長汀白沙のほとり、
 仙女霓裳の舞を夢みし

その幻境もいまは實、
 世界にあれし霹靂の狂ひの中に
 心霊の巧と思はぐくみし
 空をとぶ船、翔くる羽、
 かれ流星を碧落に逐ひ
 これ輕燕に虚空にともなふ。

大西洋横断

聞かずやアングロサクソンの
 誇り、大西洋上を
 一氣にこせしアルロツク、
 (先にホーカア九奴の功を一簣に缺くも憂し)
 ついで百丈のデリジブル
 巨大のR三十四、

悠々として雲をわけ
 潮を眺め、天漢の
 連り上に、新たなる
 大陸のはしおりたてる
 勇士スコット「大英の
 獅子王の勇止みしや」と
 世界の面に事問ふよ。
 セイクスピアの生れし故郷、
 ニュートシ、ダーキン思索の邦士、

領を四海に及ぼせる
大英の子のわざ見よと
その民一齊に眉揚ぐる。

太平洋

太平洋はいまだしか、
玉魚銀海——幻想の
翼自由に飛ぶところ
茫洋として幾千里、
新大陸の口に入るほとり
金門峽を飛びたちて、

天地一白月明の
光に翔くる者なきや、
南洋の暖潮北にはせ
北洋の寒流南に下り
陰陽冷熱一に合ひて
大東洋の雲蒸すほとり、
大鵬虚空に舞ふごとく
浩氣を凌ぐものなきや。

南歐の精華

知らずや南歐ラテンの精華
光彩あらたに他方にほふ、
むかし幻影のたちこめし
東方不思議の國にあこがれ、
風煙高く鳥飛ぶあとに
黄漠低く日出づる方に

來りしポーロ生みし郷。
 其あと更に憧憬の心をそゝり
 金色のひらめく姿照し見て、
 潮に洗ふ落日の光を慕ひ
 渺々の神秘の海に乗り出でし
 金剛の意志コロムバス、
 美なる伊太利——
 一たびは世界の霸王、
 二たびは心靈の霸王、
 クリストファを生みし郷。

幾たびか巨大の靈を生みし邦。
 千載の光輝照りわたるラテンの精華衰へず、
 新たに詩美の幻影に打たれてたてる藝園の
 奇才今更生ける詩と成りてはるか三千
 東亞の空に飛び来るや。

オリリエント

(一)

『オリリエント、オリリエント、オリリエント、
 名工レニの筆に見るオリロラ花を散らす郷、
 光はじめて出づる郷、
 紅寶石の郷、碧玉の郷、
 蒼溟の底純潔の光眞珠の生るゝ郷、

黄金の屋のひかる郷、
 サフランの花にほふ郷、
 石楠の香溪流に引かれて遠く匂ふ郷、
 百蠻のあなた長城の雲に入る郷、
 十二帝陵荒れはてし廢墟に残る奇怪の巨像、
 夜半に目をあげ天上のきらめく星と語る郷、
 神秘の文字上より下に奇怪のペンに書かるゝ郷』
 斯く西歐のファンタジイ
 忽必烈汗の朝廷に

光透き来る波の下
 黄金碧玉珊瑚の色に
 ゆらぐ潮をわくる影
 上を帆ばしる船人の眼に寫らぬ跡に似て
 東亞の玄秘今に尙
 西の想像の目に見えじ。

東の空のものがたり
 學者を坑にし書を焼ける

エニスの子入りし後
 わが東洋を夢みしや。

(二)

オリエント、オリエント、オリエント、
 今なほ遠く縹渺の神秘の雲にとざされて
 残るか——この珊瑚礁、
 千仞の底玄妙の
 しげみ花咲き藻開き
 おほいなる鰭落日の

秦の世さけし桃の原
 武陵のよさしとさゝれて
 千萬の花紅の霞にこもる春の榮
 その一片のおとづれをかすかに谷の外に洩す
 譬に似たり、西東
 文明の潮行き通ふあと繁けれど底の波
 未だ親しく交はらず。

オクシデント又オリリエント

(一)

オクシデント又オリリエント
 蒼海の上漫々の潮みだれて
 行き通ふみどりの流黒き流
 熱き沙また寒き沙
 其水よせて一片のたより空しき瓶の中

知らず知られぬ岸による
跡見る如く民俗の
精華かすかに縹渺の
雲を隔て、洩れ來しか。

(二)

オクシデント又オリエント
萬花の春のあけぼの、
詩美の國より侵入り
イサス、アルベラ轟雷の

あらびに續き遠く遠く
インダス、オクザス流にたちて
馬に水かふ胸甲の
ひらめき照らす熱帯の
炎日遂に大軍を
西へ返へししあとふりぬ。

脂粉三千バビロンの
錦繡の帳かさわけつ、

時に妖女の聲聞きて
 パーセポリスの却火擧げ、
 時に詩聖を陣營の
 燈に讀みし年若き
 大王の威は夢なれど、
 オリインポスの十二神
 高さ幻名工の
 魂にやどりし名残の香、
 吹きて傳へて金銅の

毘廬舍那の影にほひしか。

(三)

オクシデント又オリエント
 二千餘年の跡とへば
 かなたカルタゴ、海王の榮華のはての國の亡び、
 羅馬七丘赫々の力と富と驕慢と
 別に禍亂の恐るべき妖魔を内にはぐくめる
 時、こなたには詩美の華——
 哀蟬の曲、秋風の歌、

萬乗の君一代の文化の流導さつ、
 佳人を傷み歡樂の
 はかなき跡に仙の道
 求めてたてし承露盤
 金莖高く雲に入る、
 それはた一時、手を舉げて
 十萬の鐵騎大漠の外に進めば
 妖氛の晴れ行くさわみ逐はれ行く
 蠻族次第に西にはせ、

侵略の波、移住の波、
 あふれて春秋四百年、
 はては金殿玉樓の
 羅馬の都炎々の焰にやけて
 紫の衣纏へる富貴の子、
 先に異邦に臨みたる
 あとを返せし奴隸の身
 其慘劇も跡ふりぬ。

(四)

オクシデントはたオリリエント
隔て、遂に離れ得ず、
東の波瀾西へと動き
西の雲烟東になびき、
大化の氣運しきみちて
彼と此とを包む時
人類遂に一つの歴史、
落花の一片雲より落ちて
幽禽時にしづくを仰ぐ

谷間の水に落つる後
千波萬波の空ひたす
大海原に遂に入り
無形の金瑣玉帯は
同じ一塊の地球をめぐる。
(五)
オクシデントまたオリリエント、
或は西の十字軍
夕日をかへす剣戟の

光につれて文明の
 華を次第に移し植え、
 或は鐵騎百萬の
 蹄青草のあとたちし
 モンゴル、タタル、オットマン
 威を大陸の外に布く、
 あとを史上に見返れば
 運命の潮いりまじる
 波瀾のあらびうづまくよ。

(六)
 オクシデント又オリリエント、
 やがて半島イベリヤの
 岸より遠く東洋に
 サンタマリアの禮拜の
 道を傳へし法の群、
 點ぜし熱火ひろざれば
 遂に犠牲の幾萬を
 焼きし火刑の大火焔。

中に扶桑の東北、

脾肉を嘆く老雄の使一群

金華松島傍の

月島の沖こぎ出でて

わけし太平大西の

茫々の波幾万里、

幻影幻境白雲の

うかぶにつれて湧き來しか。

三春の花燃えたちし

盛はすでにうつれども、

法王殿のあけの勤行

サンビイトロの夕の鐘聲、

神秘の影に眺め入りて

そゝろに湧きし渴仰の信の姿は

合掌の使フィリップ、フランソア

支倉の畫像今もとどむる。

(七)

オクシデント又オトリエント、

紅毛の人此邦の
西海の端瓊の浦に
時を定めて海外の
富齋すを外にして
羹に懲り鯨吹く愚味の幕府
偷安の姑息の夢を貪ぼりて
春秋三百、海國の
英氣を枯らし、南洋の
天領西の侵入の

民族かすめ奪ふに任せ、
東海のみどり波瀾をたちて
隣邦四億の民衆の
興敗たゞに冷眼に眺め、
更に五天の擾亂の果、
雪山の雲憂を凝らし
恒河の流恨を籠めて、
萬里の外西歐の臣妾たりし無慘の跡、
絶へて迷濛の夢にも知らず、

扶桑維新の光明の
照りしこのかた五十年、
世界の地圖に存在の
跡のみかすか留めたる
「ビグミイの邦」今にして
列強の中一流の

時世の姿

甘眠長く悠々の春を夢みて
かくて浦賀の砲聲に
長夜の夢のさむるに至る。

名をかち得たる時の運。
大局廣く眺むれば
世界に荒れし炎焔の
餘燼全くは消え去らず、
更に再び民心の
ゆらぎあらべる颯風は
虚空をゆりて吹き來る
時、警世の目にうつる
姿は榮か暗黒か。

ダヌンチオ

時なりガブリエレ、ダヌンチオ、
アドリヤの海アルプスを越して飛行の機上より
ドナウの岸の帝城に
爆弾ならず檄文を
雪と散らして敵國の
民に宣せし秋霜の辭、

ハブスブルグの光榮は
暗に沈みて同盟の
敵邦ひとしく崩れたる
後も『イタリヤ恢復の
業まだ成らず——熱血を
わかして叫ぶ民のため
列強巴里に定めたる
不法の約に背かむ』と
をたけび高くフィウメの地

入りて略して坤球の
驚惶の目をそばだてぬ。

公法の約、國民の冀望、いづれをよしとせむ。
一塊の石抛てる湖面の亂しづまりて
天心の月やどる時真相遂に判ぜむ。
劍俠驅りさる悲憤の血汐
湧きたつ跡にかへりみて
『過ちを見て仁を知る』

ラテンの民の意氣酌まむ。

其ガブリイレ・ダヌンチオ、

天風の弓、蒼海のおもての絃を拂ふ時

千波萬波の樂湧く如く、

冥想一たびオリエント

詩影詩想のむらがり

観じて九天雲烟の

廣き高さをしのがんず。

行程三千里

歐亞の地圖を落葉の窓うつ下に打開き、

西より東三千里飛行の道をたどり行けば、

百年禍根をはらみし處

世界の大亂かもせしほとり

バルカンの空、サロニカを

過ぎてトルコのアダーリア、

回教の史に著はれしアレツボ、次ぎて
 千歳の名にもふ舊都バクダット、
 ユーフレイツの大江の岸に臨めるバスラより、
 ペルシャ灣上オルムヅの瀬戸の夕潮洗ひ去る
 パンデルアパス、チヨール、
 「エーダ」に歌ふ「河の王」雪山遠く湧き出づる
 インダス海に入るところ、
 カラチを過ぎてヒマラヤの
 雪を恒河の長江を

抱く五天のいにしへの都のデリイ、
 神聖の流れ信徒の幾萬の
 ひらがり寄するビナールス、
 天風あほり鯨鯢おどり
 朝日夕日のくれなゐに
 夜摩天上の莊嚴の光を示す印度洋、
 年に四度の收穫の豊饒を見るラングーン、
 佛に捧ぐる三千の伽藍藍濃き空に入り
 錦繡かざり寶玉つゞる白象群るパンコック、

佛領支那のハノイの市、
隣るは禹域「中華」の地、
鵬の翼も及ばねば
紫塞玉關遠からず、
巴陵洞庭影近く、
廣東、福州、後にして
楊子江頭北に飛び、
旭日の旗の今かへる
青島に次ぎ燕京を

過ぎらば近し一葦帯、
月は老い行く江上の羌笛、
風は凄じ大漠の牧歌、
義州釜山を飛びこして
扶桑の空はまたくま。
北冥の巨魚鵬と化し
垂天の翼雲をわけ
南冥の天地めざし行く

其の荒唐のものがたり、
其の幻想を凌ぎ去りて
方所の差別風土の異同
聯想更に時却の古今、
地誌と歴史の長巻を
かはるゝに披く如く
大陸あまねく見おろして
八機ひとしく電光の
羽に東亞にかくよせむ。

あゝあゝ東海思をはせて
鴻より早く長空に
機翼ひとしく沖いる時、
亞細亞大陸茫々の
山河を越して興敗の
跡はそゝろに忍ばれむ、
ダーヂリンの高原、
ヒマラヤの連峰、
飛行の途にそるゝとも

← 天馬の道に →

大聖生みし五天の姿
 君憧憬の心眼に望むやいかに、
 おほいなる詩のあるところ聖あるところ、
 あるひは赤道直下のほとり、
 大印度洋の落日の
 紅焔紅雲虚空に燃ゆる
 大莊嚴の影を見れば
 亞細亞のために幸祈れ。

← 行程三千里 →

大陸亞細亞歐羅巴、
 虚空のうへに隔らず、
 千載永く光榮と
 詩歌と平和と文明と、
 明珠互に相啣み
 寶鏡互に照す時、
 天馬の道に南歐の
 詩神の寵兒生ける詩を
 つらねし功朽ちざらむ、

人間長く情ありて
胸の鼓動に英靈を
讚する限り朽ちさらむ。

おほいなる惱

さもあれ機體濛々の陰霧の層を凌ぐ時、
電霰さながら弾丸の雨よりしげく敲く時、
颯風あれて眞向に怒の槌を振ふ時、
機上不斷の轟雷に更に電光の襲ふ時、
おほいなる業おほいなる惱につぐを觀ぜむか。
感激熱き血を湧かし

櫻の花の國の子ら
 飛行の賓に幸祈れ、
 何者慢にあざけりの
 「賣名」の一句空界の
 勇士のわざを判ずるや。
 青春つねに感激の
 泉湧くべき本にして、
 徴を化石を塚中の
 枯骨を學ぶ何の意か。

火輪はじめて波切りて
 大西洋を越さん時
 フルトンの名に注がれし
 侮慢の言葉思ひづや、
 時の古今に憾むべく
 盡さぬバリサイの徒をよそに、
 黄金の巨鐘凜として
 曙光の空に鳴る如く、
 生ける英雄の詩歌として

百年これより歐と亞の
文華の路も繋がれる。

來りて活火わが隨に
注ぐ勇士に幸あれよ。
巨海の波浪、
大漠の颯風、
その障を下に見て
東と西と空中の
路を結べる大偉勳、
その導に勵まされ
南歐の機途追ふて

その来る時

嗚呼南歐の詩人フィウメの勇士、
 万里長空をわたり来て
 八機一齊の友と共に、
 其いにしへは茫々の草また草の武藏野の原、
 今は人口貳百萬數へて亞細亞最大の
 誇りの都東京に巨大の翼たゝみて曰ふか、

『Χθονός μεν εις την ουρον ηκουεν πτόου』
クハソノス、メン、アリス、テールロン、ヘーロメン、ヘン、

マルコボロのあこがれし、
 又コロムバス夢みたる、
 近くはハルンの錦心繡腸、
 ローマンチクの色彩に
 寫せしところ畫さし處、
 君いま東海の現實に
 幻影の亡び嘆くやいかに。

嘆くをやめよ幻影の亡び、
心の期待を常に裏切る
世の現実の恨みより、
却りて心のおほいなる
靈妙無限の跡を眺めむ。
詩眼に眺むる一切は
皆悉く詩の境、
南歐の詩人フィウメの勇士、
來りてこゝに極東の

空に盡さざる美を望め、
恐らく扶桑千載の
山川の靈髣髴と
今おとづるゝ天才の
筆を待ち得てほゝゑまむ。

日本にほんの風姿ふうし

花はなに埋うもるゝ紅くわなるの霞かすみの春はるは遠とほくして
 今いま錦きん繡しゅうの秋あき飾かざる紅あか葉はも菊きくもうつろへど、
 東とう海かいの驛えき五ご十じゅう三さん、
 廣ひろ重しげの繪ゑの生いける影かげ、
 舊ふるき都みやこの雪ゆきのあさ、
 三さん十じゅう六ろくの峯みねならぶ

下したは鴨かも川がは冬ふゆ枯がれの
 流ながさびしとかこつ時とき
 別わかれに絃げん歌かの春はるも湧わく。
 山さん陽やうの岸きし一いち百ひゃく里り、
 長なが汀てい曲まが浦ぼ一いち々々の
 うねり新あたらたの水みづと山やま、
 微び妙めうの姿すがた見みるところ、
 メシナ、ナポリと影かげいづれ、
 マグナ、グレシヤ跡あとのこす

エトナの下もとのタオルミナ、
並ならぶはこゝに三保はの浦うら、
千秋しゅうの雪ゆきてりわたる
芙蓉ふようの嶺みねを仰あふぎ見みて
ひかしせんの女にょの霓裳げいしやうの
羽衣ういの舞見まひしものがたり、
西海せいこして耶馬やの溪けい、
神斧しんぶ彫きざめる石いしの山やま、
共ともに比くらべて東海とうかいの

天龍てんりゅうの峽けつ幾いく十里じゆり、
東北とうほくの山波やまなみの如ごとく
溪たにに湛たふる明鏡めいけいの
十和田とわだの湖水こすい仙せんの郷きやう、
ラゴマジョレを思おもひ出でて
東北とうほくの陸盡りくじんくる所ところ、
山やまは黄金わうごんの名なに出いでて
萬丈まんぢやうの巨巖きよがん怒濤どたうを呼よび、
鯨鯢けいげい躍をどる暗緑あんりくの

千里の潮矢の如く、
米大陸に通ふところ。
南溟遠く湧きたちて
寄する暖流洋々と
水の百靈率ゐ寄せ、
オコック海の寒流の
潮に混じ逆捲きて、
雲蒸し波湧き風あらび、
萬仞の淵タスカロラ、

太平洋の名を外に
巨濤駭浪空を拍ちて
海の望城萬噸の巨大の艦もよろめかむ。
争、競、紛擾の
一面すでに足れりとや
青螺幾百松島の
一灣かなた微笑を湛ふ。
あゝ山聳え、水流れ
深きは湛へ、玲瀧の

姿あのおの凝らす中
たそ蓬萊の影留むる
松島之美を聞かざらむ、
東奥遠く隔つれど
傾國之美の隠れざる
跡はたかくか、憧憬の
的、東西、千萬の
人の思に往き通ふ。

東亞の美術

南歐の詩人フィウメの勇士
我が東海の藝園の
花の盛を如何に見る。
老來長く青春の薫に色に筆にほふ
絢爛の權化チチアノウ、
比はわれの北齋か。

北斗を仰ぎて立てし盟、

貫く一念焰と燃ゆる

勇猛の意氣百年の永きを期して技みがき、

八十五歳豪健の氣を吐く「邪神雌伏」の圖、

遙に青春の筆を凌ぐ。

さもあれ北齋世界に知らる、

別に優りて知らる可く、しかも未だ知られざる

巨匠の數は幾何ぞ。

紅霓の色、七彩の巧

遠き五天の法の道

呼びし起せし媒し

源は千載の舊きより湧き、

『二十五菩薩來迎』の

偉大の佛畫燦として

渴仰の光心靈の

偉なるを忍び藝術の

神秘一味の美を極む。

チマブエ、ヂョットいでし世を
さかのぼり行く四百年。
東海の波浪空をひたす
邦この至大の藝術を
生めるを西はよも知らじ。

四明天台第一座
僧雪舟の偉大の畫、
その源流の末を酌む

筆を合せて西歐の
ゴングウルの眼は眺めしや。

頽唐の風流東山、
勃興の藝術桃山に
つゞく徳川覇府の春、
瑣國姑息のあと乍ら
太平の春はぐくみし
百花の榮のいみじきを見よ。

雲

江戸の紫、京の紅
 染めしにほひし彩の筆、
 名匠雲と群りし
 末もいろどる綾錦、
 錦の畫のみ西歐に
 獨りあまねく知られしも憂し。
 シヤバン、モロウの刷毛の上
 わが極東の藝術の

あとほのかにも眺むべきを、
 やまと櫻の花の彩
 西のそらびの香にふれて
 やがて來らん春いかに。
 すべては不可知——、謎を解き
 神秘の鍵を握るわざ、
 たゞ皇天の恩寵の
 光を浴ぶる子に待たじ、
 敬の一念身を捧げ

俗と富との威に屈せず、
「席畫」のたくみ醜陋の
あとを厭はむ子に待たむ。

藝園次第にその派を分ち、
更に競ひて「新」を求め

「怪」に入りまた「變」に出づる、

「立體」の派か「未來」の派か、

誰か紛々の跡を見て

渦流の中のたゞよひに

審美のまなこ明けく

よく研醜の判を下さむ。

バクトリヤ大漠の颶風あらびて

吹き捲くる濛々の沙塵の中、

「カラバン」のたどるべき途消ゆる時、

仰ぐは天上の巨星の光、

斯くまた藝術その途暗く

傳統その威を失ふ時に、
列世かやく巨星の光
啓示を行ふべき前途に垂れむ。

東亞の時局

南歐の詩人フィウメの勇士、
君「頹唐」の名を蹴りて
大戦亂の怒濤を押し切り、
更に詩想の靈の羽
人工の羽左右に延ばし、
扶桑の郷にあとづれて

こゝに一面混擾の
 局を如何なる眼に眺めむ。
 眼界狭く掩はれて
 執る筆鈍さわが傍
 潺湲の流水一年終り、
 萬片飛び散る花と紅葉と
 去りて無何有の郷に入る時、
 飛鳥の跡は窮まらず、
 東北の天地蕭條の

窓に静に過ぎし年
 起りし跡を列ぬるを、
 雲漢の文、天上に
 連ぬる君は憐まむ。
 一絲亂るゝ跡絶えて
 整ふ理路の明けき
 論理の途は我に有らず、
 空に横たふ一赤幟
 我が陣勢を張るにたへぬ

われのミューズの荒む園、
たゞ蔓草のみだれ行く
跡を不敏の子に許せ。

小山鼎浦を弔ふ

世界にあれし戦亂の
雲收まれるあしたの空、
濛々の陰霧なほ暗く
不安の思繁き時、
銀河の光露を含める
湘南の一夜秋たちて、

鎌倉五山の愁烟深く
浄明寺門の傍に、
あゝわが小山鼎浦逝きぬ。

金華の西北松島の奥、
東はたゞちに蒼海萬里、
米大陸に隣り合ひ、
天風海濤永しへに
枕に響き、袂を拂ふ、

鼎が浦に呱呱の聲
挙げしこのかた四十一年。

哲人の薫りを慕ひ、
經綸の策をめぐらし、
學窓のもと幾年の
思を練りしあかつきの、
風雲一たび吹き捲きて、
怒濤の中へ乗り出でし彼れ。

金鐵の意思身を驅りて、
蒲柳の質も顧みず、
三寸の舌霜刃の
威は幾度か衆賢の
府に國のため民のため。
筆端また湧く萬石の泉、
文を論じ、詩を談じ、
時を傷み、世を嘆き
政界の浮沈、國の危機、

跡を究めては激越の文、
幽玄の境思ひを馳せては
橄欖山の夕暗の
高き祈りのあと讃じ
靈山の會、光明の
伴に心の調べ添ふ。
風塵のもと、病める身を
湘南烟波の岸に托して、

誰か紛々の跡を見て、
 高士一代の懐を探らむ。
 形骸寄する假宅の中、
 狭かりし、又低かりし、
 時世の暗を君いかにせし。
 ああ、東方のあけぼのの
 くれなるの色近づけど、
 頭上は君に暗なりき。

高くも臥せし一代の志士、
 相向ふ絹張の山、
 七百年前、將軍の
 風雅のあとを尙傳ふ、
 芬蘭の香を明窓の
 中に幾年君は缺きしを。
 一黨一派—水か火か、
 「憲政」の人か—「政友」か、

奴隸の道か宦官の
威か、混濁の世に飽きて、
思を無象の郷にすれば、
明月照りて清風薫る。

さるにても、四海の波瀾
大戦亂の収まりの
あした再び世の悶え、
労働の子等聲あけて、

東縛の鎖絶たむ時、
さもあれ百年地窖の暗に
眼は光明にまだ馴れず、
盲動これより幾度か
迷妄の群驅らん時、
君その生を長うして
怒濤の岸の宵暗に
燈臺の火と成るべかりしを。

天上の虹霓とこしへに脆く、
 地上の芳蘭空しく碎けて、
 孤館の旅に淋鈴の雨聴く思ひ、
 長江の白帆遠く雲と紛ひて
 愛兒の影を引き去る如き
 思ひ薤露の歌は誘ふか。
 五稜の衣輕うして
 其馬肥ゆる今の時、

邊境の空に、マチイニの文
 襟を正して夜半に誦すれば、
 尊とし一代哲人の訓、
 『幽玄の中、敬虔の
 意志ある所、他の世界
 また靈魂の勤あらむ、
 信ぜよ』ところ、尊としや。
 ああ、鼎浦、

いづれの時か神祕ほどけむ、
 聯想はしなく過ぎつる春に。
 春は名のみ時にして
 空牙え返る風寒く
 廣瀬の流咽ぶ時、

眞鳥博士の愛児を弔ふ

靈今去りて安くに翔くる、
 銀漢遠し千萬里、
 いづれの時か神祕ほどけむ。

善よきに加くはへて善よかれとの
 暗やみにはあらぬ親おやごゝろ
 こめし思おもはあだにして
 手て術じゆつの臺たいのねふりより
 往いきて歸かへらぬ天あめのをち
 花はなとにほひと光あかり明あきと
 一つにまじる天あめのちち。
 あゝあゝ此この兒こ純じゆん眞しんの
 心こころと信しんと清せい淨じやうの

たそ斷腸だんちやうのしのびねに
 逝ゆく魂たましひを悲かなめる。
 やがては照てらむ金剛こんがうの
 光ひかりか珠たまか、花はなにして
 風かぜに薫くんずる幽蘭ゆうらんか、
 樹きにしていみじ梅檀ばいだんの
 双葉ふたばはすでにかほりしを。

思眞珠の精の如く
末期いみじき祈より
翰林の上一代の
譽たうとき恩愛の
父を、ほまれの淑徳の
母を、望と信仰と
愛の教に導ける
いさを何等の言に讃ぜじ。
短き命春の夜の

朧の月を待ちあへず
ひとひら雪に寒梅の
薫りむなしく散る如き
はかなき跡も尊としや。
「實」は遂にみゆるなりけり
人生の秋つねの身を
待たずも遂に「み」ゆるなりけり。

森 村 翁

更に老年八十一、
泥中の白蓮、死海の明珠、
東方未開の世の習ひ
官権金権互に結ぶ
暗夜の飛躍、白晝の横行、
かくして集むる巨萬の寶、

絃歌と緑酒と放縦と
靈を賣り肉を腐らし、
頭上に積める薪の重さ、
子孫の爲に蛇蝎を作る
無慘の輩の中にして、
俠骨高く一代にかほり、
名のみかほれる奸佞の
巨大の權に嚇されず、
千里獨往、凜として

ひとり奮ひしあと思ふ。
烈士の暮年心霊の光新に、
十字架の教によりて
西山に傾く日影いやてらし、
いまはの床に説く教
いまはに残す筆の跡
遂に古聖の徒に恥ぢず、
大なるかな信の人、
大平民森村翁。

勳か爵か功名か、
地位か學位か、——茫々の
幻霧の中に一瞬の
盛を競ふ夢の花、
財界の盟主、企業の策士、
皆紛として流星の
消ゆるが如く亡び去り、
大靈の息いぶく時
みな北邙の塵として

無限の淵に沈み去らむ、
残るは天と地と時と
その精髓の人の誠。

板垣退助氏

此の年偉大の彼も逝く、
南海の産、一代の雄、
自由の先驅、維新の功臣、
果は猛炎おさまりし
死火山の影、聲もなく、
老いたる麒麟、涸れたる大河、

碎けし芳蘭、錆たる寶劍、
いにしへ岐阜の刺客の刃、
むごくも彼を逝かしめず、
殘骸曳さずる無慘の幾年、
さもあれ落日最後の光、
大平民の熱火熱情、
未だ全くは消え去らず、
野蠻の遺風惡差別——、
人爲の階級たやすべく

死後に残し、一片の意氣、
なほ凜として贅物の
膽を冷すに足るべきか。
あゝ光榮は斯くと見よ、
陰雲拂ひて光を仰ぎ、
荆棘拓きて花を植ゑ、
東亞千歳陋習の
長きを破り、自由の大義、

大光明を大空に
現ぜし偉勳とこしへに
わが憲政の史に残る。
あゝ光榮はかくと見よ
『板垣逝くも自由亡びず。』

一つの死

風無きに落葉の雨はらくくと
わが閑庭の秋の韻律。
一片の落葉支ふ蜘蛛の巣か、
それはた風に破れし断片。

脆きは蜘蛛の巣、脆きは落葉、
脆きもの脆きを支ふ、
共にいくばく残る命ぞ。

こゝにも一つ終の別れ

おくれしものは後に嘆かむ

果ては一つの土に歸れど。

閑庭の秋のさびしみ

門前の鈴けたしまし、
一片の號外何をか告ぐる。

逝けりや閻族最後の巨魁、

干潮次第に引き去る岸に

残りし一塊巨大の破片、

嘗ては波濤の怒りを凌ぎ

浩浩はてなき潮を分けき、

今また泥土の堆積おほふ。



邦家の基に勤めを捧げ、
陋習破りて輿論にたより、
大義を正して其分守り、
誠をいたさばいみじきものを、
その材計らずその身を知らず
麟閣の上黄金の
印を帯びたる不似の分、
世界の局を眺むべき

一 双の眼に乏しくて、
歐の中原軍閥の
巨魁の力を信じ過ぎ、
施設の道を誤りて
遂に悔恨の氣を病める、
老骨いと憐むに堪ゆ、
さはあれ、彼なほ誠を持しき、
(化石の誠も無きには優る)
九泉のもと逝けるもの

皆一齊に安かれよ。

あゝ 日月の色いたみ、
風雲山河共に泣ける
世界にあれし未曾有の大亂
思ふも戦慄たへがたき——
あゝ 彼れホーヘンツォレンの驕兒
『敵を知りまた我れを知る』

大戦の追想

あゝ 日月の色いたみ、
風雲山河共に泣ける
世界にあれし未曾有の大亂
思ふも戦慄たへがたき——
あゝ 彼れホーヘンツォレンの驕兒
『敵を知りまた我れを知る』

古今にわたる兵家の模範
 孫子の教目に觸れず、
 セイヌの岸の華麗の大都、
 シャンゼリゼイの路直く
 凱旋門のそばだつ處、
 たゞ一朝に邦るべく、
 幾十年の久しきの
 備をつめる百萬の兵
 あげて、公法一片の

紙と宣して中立の
 領に無慚に侵入り、
 十有四寸の巨砲の力
 リイジ、ナミュル、ブラッセル、
 またくひまに抜き去りて
 天魔の嘻々の凱歌のほこり。
 續いて東又西に
 百戦常に百勝の意氣。

ヒンデンブルク巨像のほまれ、

ルウデンドルフ渴仰の的

悪運永く榮ゆべく

ほこりし幻夢一朝にさめ、

一千九百十八年

月の十一、日の十一、時の十一、屈辱の

白旗はフランス北方の空。

聯盟の諸邦二十七、

歡呼に續く世界の平和

光忽ち乾坤を、

照らすと見しも幻か、

西歐の文明一面の

弊久しきにたへざりし

波瀾の崩れ、戦亂の

狂ひに更に促され、

更に恐怖の度を増して

あれ來階級苦戦のさけび。

無意識の中、人間の
生を改め、全歐の
爲めに計りし傀儡か、
セントヘレナの流竄の人、
ホーヘンツォレン彼も亦
知らず知らずに光明の
新天新地の爲に備へむ、

狂 瀾 怒 濤

さもあれ光明遠し、遠し、
一千九百十九年
暮秋のあらし錦を拂ひ、
アジャ大陸北の端、
シベリヤの空幾萬の
卒氷雪に悩み行く

天地一白茫々の
中に、オムスク敗滅の
はて運命の明日如何に。
禹域の南、長江の
ほとり同胞安からず、
A、B、C、は何の意か、
更に遙かに海外の
冒険浮浪の群寄せて、
われの臥榻のかたはらに

民族自決の聲を揚げ、
鷄林の空燃えいづる
薪に油添へなんず。
波瀾の起伏、四海にわたる
魔女の鼎の中に見る
渾沌、紛擾、怪と奇と
白日の中、光明の
てらすか中に行はる。

妙音の名手バテレスキイ

今政界の杖ふるふ

そのポロランド國疲れ

民衰へて隣邦と

干戈の争尙ほ絶たず。

バシャア、エンベル極刑の

宣告を受け海外に

逃れさるもの忽然と

クルルデスタン大封の
金冠あらたに戴きつ。

骸骨の冠り聯合の

敵軍の膽破りたる

猛勇の元帥マツケンゼン

運命つきて囚はれし

その監禁を今は免れ—

人道の聲、正義の聲、
聯盟の聲まづ擧げし
北米の邦今にして
黨派の策か私か
平和の批准われより拒む。

更に四海の大波瀾
暴るる一脈襲ひ來て
『米貴くして窮まらず』

年々珠を買ふに似る』
隨園の嘆まのあたり
扶桑の邦は安からず。
熔爐に燃ゆる火焰の中、
鼎に沸きたつ熱湯の中、
過去の權威は夢と崩れ
未來の幻影うづまさわたる
渾沌の時期、
醜醉の時期、

改造の時期

暴風の中

狂浪の中

激動の中

I. W. W.

Bolshevik, Striker

まねか、自覚か

東海の邦

また労働の咆え叫び。

民よサイレンの聲を恐れよ

民よ、サイレンの聲を恐れよ、

天を否定し信を罵り、

『神と正義と律と道と皆ブルジョアの幻影』と

笑ふ妖魔の聲を恐れよ。

見ざるや照す歴史の明鏡。

平等友愛自由をよびし

いにしへフランス革命の
神聖の業、末流の
濁り次第に波瀾をあげ、
ボルセビズムの今に似し
セイヌの岸の赤き狂ほひ、
尊き名もて犯したる
無惨の罪と悲劇幾何。
更にふたたび又三たび、
七月の革命、二月のそれ、

その果濁浪うづまきわたり
靈火の焰消えし時、
民衆の友、友をうらざり、
政權ひとたび其の手に歸して、
たゞ物欲の私に
虎狼の如くに振舞へる—
すべては唯物思想の餘弊。
天を敬せず道を信せず、

たゞに功利を唯一の
的とねらひて如何にして
献身犠牲の道を踏み得む、
權威と富貴を前にして
嗚呼彼いかで氷霜の節を守らむ。

マチニイに聽け

その狂妄の群を外に、
襟を正して南歐の
聖者の聲に耳立てよ、
遠きいにしへアゼンスの
聖と其軌を一にして、

「Pensiers ed Azione, Dio e il populo」

哲理親しく身に踏める
 チュセブ・マチイニ、崇高の
 「改造の権化」、末世の聖徒、
 「其の心臓を開き見ば
 「イタリヤ」の文字認むべき」
 彼ロンドンの孤館の夜半、
 筆を下し、千古の教
 経綸の策、治國の道、
 宇宙の底に潜み湧ける

幽玄神秘の聲に和して
 残しし言に耳立てよ。
 春蠶吐きなす幾丈の糸、
 賢人書き残す幾卷の書か、
 一千八百七十二、
 傾斜の塔のピサに逝ける
 六十七年生を收めて、
 粘を解き縛を去る
 靈は無窮の光逐ふ。

惱める魂

世界にあれし戦亂の颶風に打たれ
恩愛の子を珍寶を皆失ひし
百千萬の心の痛み、
千歳の傳統力なく
金色十字の標象の
基の光かはらねど、

微を穿ち細を窮むる
碩學幽界の魂を思ひ、
流血、火焰、掠奪、叫喚
現世の冥府の狂ひ見る
文豪有限の神を夢みぬ。
橄欖の山、ゴルコタの野、
佛陀伽耶の塔、鹿野の苑、
みなおほいなる「いつくしみ」

皆おほいなる「悲み」の
権化のあとを見しところ、
人間の魂あこがれて
幽玄神秘の光見るべく
遠く千歳のむかしに返る。

その靈魂のあこがれの
無窮の基、九天の
上の無象の高さより――

探れど幽淵はてしなき
不可知、不可量、不可思議の
極み、其前ひれふして
注ぐ涙はひとり賢し。

眞、善、美、一のトリニテイ、
理と神明と永遠とまた神聖のトリニテイ、
その聖壇に渴仰の靈の香火を燃やすもの
正に「四海の同胞」のおほいなる意義悟り得て

一切の聖に信を捧げむ、
一切の敬に禮を致さむ。

東方の聖經

オリエンツ、オリエンツ、オリエンツ、
光はじめてにほふほとり、
雷音潮音とゞろきし
いにしへ遠し二千年、
人天ひとしく讃ぜしところ、
光明十方に溢れしところ、

それも流轉の理に洩れず、
 八萬四千みな鳳毛にあらざれば
 末流次第に濁波を揚げて、
 或は煩瑣の形式の罪、
 或は腐敗と靡爛の塊、
 或は牽強附會の辨、
 或は末派の區々の争ひ、
 摩尼の光を汚しおほへど
 その垢掃ひ曇去るとき、

東方聖經無限のかゞやき
 永く心靈の世界に照らむ。
 南歐の詩人思を潜め、
 こゝ靈泉のみなもとに
 酌みて荒れたる西歐の
 思想の沙漠の上にそとげ。
 『一切の現象、有爲の法、
 生ぜず、滅せず、來らず、去らず、

一に非ず、異に非ず、常に非ず、断に非ず』
その一片のひびきにも
むかし五天の空に映ぜし
燦爛無上の光明の
跡をほのかに見るべからずや。

紺紙金泥寫經

その渴仰のあとの一ふし、
いはれゆかしき上臈の
筆染めなしし金泥の文字、
今わが前に披かるる。

勾欄からむ紅の袂につゝむ露もく、

天の錦繡たちきりし夕の雲の褪むる時、
 暮山の鐘に花散りぬ。
 瑤臺の夢いくよひぞ、
 鏡湖しづめる月冷へて
 玉笛あすは秋に咽ばむ。
 あゝ漆なすたけの黒髪、
 撫でしけづりし幾春ぞ、
 遠山のみどりひとり残りて
 心の暗の墨染の袖をかゝけてうち向ふ
 羅甸の机(ちりばめし花か百鳥、紅は

碎け影失せ香も消えて、
 五天の空に轟きし無上法音妙音の
 餘韻をつゞる金泥の筆。

あゝ目あるもの、靈境の光ほのかにかひまみて
 神秘の影に震ふもの、
 見るや笑と涙とのあなた、生死のおほ海の
 とゞろくあなた限りなく
 無象の波瀾うづまけり。

その幽冥の海知らず、
人はひなしく漣の
小河の岸に咲く花か、
散りて不可知の大潮に
ひかれ深淵の底くぐる。

葡萄酒の美酒のくれなるの
光たへし壺碎け、
玲瓏の歌玉まるぶ

彩羽やどりし籠やぶれ、
寶鏡錆びてやどる影なく。
輕羅すたれてつゝむ身ぞなき。

今追想は少ひそめて
露を含める玉殿の夕、
「愛」と「哀」との手を取れば、
なほ紅頬のさびれゆく
なごりの匂ひ、傷魂の

といきに胸や高まらむ。

その煩惱の大海に

たゞよふ泡をみそなはし。

大悲大慈のまなじりを

かへさせたまへ無上尊。

『金剛般若波羅密經』

姚秦三藏鳩羅摩什譯

法會因由分——如是我聞——』

冥目やみてつゝましく

震ふが如き寒月の

霜牙ゆる夜に凜として

金泥の筆くだししや。

風とゞまりて大江の水、波は定まり

烟散じて碧山の月、影は澄むべし。

東方の聖經 (再び)

東方聖經無限の光、
譬へば天の穹窿に
銀漢、星辰、星霧、星雲
ひらがりわたり、一々の
星みな燦爛の光明に
十方の世界照すに似たり。

永く人類の驚嘆の的、
六百卷の般若、神聖の般若波羅密多、
大佛頂首楞嚴經、
楞伽、圓覺、涅槃經、
不可思議解脱維摩經、
妙法蓮華一乗の經、
(常不輕)の功德より佛果を得たる物語、
經を奉ずる末流の排他のわざを戒めむ)
西方の彌陀、大愛の教を説ける三部經、

四十九會の金口の教集むる寶積經、
八萬四千法門の高き貴き一切は
いづれか實にあらざらむ。
たと末流の劫を過ぎ
敬虔の人崇拜の
熱に驅られて誤りて
加筆省筆恐らくは
大摩尼寶に疵つけし
その跡爲しと誰か斷ぜむ。

高等批評の見るところ
清鑑いつか春秋の
長きにわたり明月の
光寒潭に遂に澄むべし。
たゞ木を數へ林を忘れ、
一念の誤つたへつたへて
末流互に誹謗を事とし、
一字一句の争に
忍辱あのかゝ忘れられて

はては流血の慘さに到る。

ナザレの聖の教の史、

中古煩瑣の争の

Homolousion Hemocission

蠻觸二邦の跡見る如き——

或は新舊二教の戦、

三十年の久しきにわたりて歐の中原を

鶏犬の聲絶ゆる迄沙漠の如く荒し去れる——

或は覇業の夢碎けアメロンゲンにすくまれる

「破れし偶像」その昔「黄禍」を唱へ黄色の

異教「絶つべく全歐の聖十字軍唱へたる。——

皆因襲の囚はれに道の大局認め得ず、

寛容の徳知らずして、暗に迷ひし狂妄のはて。

あゝ、人天の路を繋ぎ、妖魔の暗を絶やすべき

光明の軍、一切の古今にわたる教の道、

(萬法を統ぶる只一理)

其の崇高の名の下に人類互に血を流す

何等の矛盾、何等の背理、
其の惨劇はすでに足り、
其の迷妄はすでに古りぬ、
起て改造の新しい世
起ちて妖魔を地に踏みて、
一切の信に禮を拂ひ
一切の敬に敬を捧げよ。

大方廣佛華嚴經

廣大を説きて包まざるなく、
精微を述べて備はらぬなく、
十方虚空を一毫に含み、
無量刹土を芥子に納むる、
おほいなるかな華嚴の世界。
華嚴の莊嚴わが目を眩し、

華嚴の光明わが蛾を誘ひ、
華嚴の炎熱わが血を湧かし、
華嚴の芳醇わが魂酔はす。
夜摩天上百萬の金網
兜率天上億萬の光明
たゞ比なくおほいなる
華嚴法海の一しづく。
風浪消えて大海の水の鏡と澄める時、
天上の姿一々の影悉くうつる如く、

無明の劫波しづまる時、
煩惱の劫風収まる時、
世尊無上の位に坐し、
海印三昧の定の中、
一切三世の法を皆見る、
「顧み見れば無量の刹土、
無量の劫の遠きより、
衆生の煩惱濁らすところ、

分別欲樂一相ならず、
心に隨ひ業を造る…
『その業力に流轉の姿、
幻夢の如き、泡の如き、
一切の衆生大悲に救ひ、
惡業魔業の惱ますところ
正法を誹る極惡人、
みな大愛に救ひ取らむ』と。
四大海水のたゞ一滴、

超世金口のたゞ一音、
拔きて西歐の客に示さむ。
ダンテ生れし西曆の一千二百六十五。
その年遠く遡る五百六十六春秋、
大唐の聖曆第二年、
干闥の國に求め得し
貝葉靈文海を踰へ、
漠を渡りて譯成れば、

五天の空に惜むべく
梵文跡をとめねど
なほ燦として仰ぐべく
八十華嚴一切の
法界の上に永く照る。
西歐たれか人ありて
この東方の至上の寶
更にアリアンの文に返さむ。

詩の大海、—ダンテ

東方聖經無限のかじやき、
詩なり、歌なり、妙音のしらべ、
或はやがて西歐の文化の中に流れ入り、
新たに偉大の詩歌を生まむか。

詩の大海に注ぎ入る百千の流、
億萬のしづく、

詩の諧音を組みたつる百千の律、億萬のしらべ、
詩の大空に充ちしげる百千の森、億萬の花、
詩の大空に照り光る百千の銀河、億萬の星辰、
詩の天領を構へ成す百千の邦土、億萬の民衆、
詩の宮殿をいつきなす百千の樓閣、億萬の衆寶。

美なるイタリヤ、南歐の海は濃藍の色をひる邦、
野はひなげしの眞紅の春さながら火焰の燃る邦、
歌ふミニオン憧れし「チトロローネンの花咲く處、

金色ひかるオランダン累々として實る處、
ミルテ静にロルビイレ緑に高く立つ處」
ダンテを生める美なるイタリヤ。

そのアルノウの岸逍遙の
一日サンタ、クロウチエに
ひかし東海の旅の子の
仰ぎし巨像、詩聖の姿、
星の冠の天人を
護となして沈静の

おもかけ眠る海の如く、
瘦せたる腕に頬支へ
思を無窮の天に馳する、

あ、ダンテ、アリギエリ、

月桂の樹のしげみより嵐にもまれ出る月、

滄溟のおもて激浪のおさまるあとにうつる星、

煩悶苦惱の大なる海の底より得し眞珠、

中古千年かくて聲を

百丈の銀箏虚空にかゝり

一々の絃白雲の峯吹き捲くる大風の
吹嘘に應じ鳴く如き巨靈の歌にち得たり。

レオナルド、ダ、フィンチ

偉なるイタリヤ、——永遠の
ローマの都たつ處、
一木一土おほいなる
名ありし者の化する處、
關河霸國の興亡を
經て近代の文明の

曙光はじめて照りし處、
その燦爛の光明の
昇るこのかた湧きいでし
名匠の群いくばくぞ。

聖は五天の曙に尼連禪河の照し、身、
聖はゴルコタ丘上に神の如くに逝さし影、
今人界に萬能の才を見すべく降り來し
「驚異」の權化レオナルド。

一切を蔽ふ無邊の想像、
 時の唯一の娘なる真理に歸依の生の跡、
 曙の紅夕暮の紫染むる
 天上の榮を下界に移す術、
 ヌロミチアンの白き石、
 フリシアの岩、
 金剛の
 力に刻み活かす術、
 兼ね得し絃歌詩賦の道、
 思索の幽洞暗さを尋ね、
 数理の樂園廣さを探り、

三千の秀才等しく榮え
 一代の藝園いみじく匂ふ
 春南歐の七彩の光の中に抜け出で、
 神秘の巨靈澄み渡る眸あまねく創造の
 あらゆる領を貫ける —
 微を分ち細に入り
 小大洩さぬ緻密の知性、
 天を翔り地に潜り

殿堂宮殿城壁運河巨大の腕に作りなし、
 人體の線山嶽の姿河流の廻り行く路悉く究たる
 玲瓏の才、不可知の神秘、
 彼れ替らざる永遠の自然の法の前に立ち、
 眞理の海の渺々の果なきを見て肅として、
 「勤めし日の後甘き眠、
 勤めし生の後樂しき死」
 吟じて無底の幽淵思ふ。
 大なるかなレオナルド、

一切の世はダ、キンチ
 名に光芒の極みなき
 靈火とこしへ忍ばざらめや。
 東亞の微なる小詞人、蛾の燭光にあこがる、
 讚美の筆を揮ふ日をさかのぼり行く四百年、
 彼れ人界を捨て去りし一千五百十九年、
 時を禹域に尋ねれば
 長江の水ひろがりて鄱陽の湖と成る處、

千古の大儒王守仁、

恐らく未だ西歐の空に見えざる一巨星――

(帝王の聖者オレリアス、

「金殿玉樓の中になほ道を踏み得」と千秋の

妙音宣りし聖の人、

奴隸の聖者、エビクテタス、

宰相の聖者、諸葛亮、

儒臣の聖者、王守仁、)

風雲の機を胸にして宸濠の亂治せし年、

東と西と心霊の道隔つれば

大なる靈は互に相知らず、

無限の軌道を虚空にゑがき

知られず過ぐる彗星の互の跡にさも似たり。

李太白と杜少陵

唯に同代の上とせじ、

オクシデント又オロリエント

國の精髓、文の華、

詩の美、微妙の香に薫じ、

流に澄める月の影

捉ること難き跡に似て、

異邦の俗に入りがたし。

崑崙の東、長白の西、

時は盛唐の文華の極み、

青蓮起ちて千春に

輝垂れし聖の筆、

古風の精華連ねさる

五十幾篇爛として

永く大雅のあとをつぐ。

白帝の城、廬山の瀧

沈香の亭、牡丹の詠

たゞ蛟龍の片鱗か、
天山出づる明月の光長風の吹くに駕し
萬里はるかに玉關を渡るに似たる彼の歌。

杜陵の詩聖百代の
粹を集めて華を咀ひ、
書を読みて萬卷を破り、
筆を下して神あるに似し
北征の古詩秋興の律、

剖かば紅血ほとばしり
投げなば金石の音あらむ、
兵戈の中のさすらへに
恩愛の子ら飢に逝き、
一枝に巢くふ鶴鴿の
跡を學びし辛酸に
から得し萬歳の名も悲し。
太白少陵時を一に。

羅浮天台互に對し
長江黄河等しく流る
此れワチカンのラファエルか、
彼れシスチンのミケランジ、
其大なる星二つ
無知の暗黒たちこむる
烟霧は西に光蔽ふ。

ミケランジェロ及びラファエロ

崇大の侮慢一代の俗を見くだすミケランジ、
美の一切の創造の靈にひれふすミケランジ、
八十九年金剛の意志を貫くミケランジ。
萬華の春を粧ひし巨靈次第に去りし後
なほ夕陽の照す影長空の雲いろどりて
更に光を昇るべき無象の天に追ひし人。

カルララの山切りいだす
 マーブル生きておほいなる
 モーゼス夜半に星と語り
 システンの中、神聖の
 狂に熱して幻影の
 群壁上に湧きいづる —
 聞かずや千歳不朽の言葉 —
 『完美は小さ細さに起り
 完美は小さ細さに非ず』

あゝ群小の嫉より苦惱は常に山と積める、
 さもあれ法王帝王の敬と愛とに包まれし、
 光明暗影濃かりし巨匠、
 比を樂界に求むれば
 ラインのほとり月光の曲を夢みし天才か。
 緑眸の女神アテイネイ
 金甲穿ち雷霆の
 神より生れし跡に似る

ラファエル、サンチ、一朝に
美の圓滿の域に入り、
三十七の春秋に
窮めし巧百千の
はるけき遠き世を照す。

天使の如く美はしく、
少女の如く柔かに、
富貴、歡樂、光榮の

中に王公の生送り、
その若き死も皇天の恵の外にあらざりし
藝園の奇蹟、萬古の畫聖、
ローマみどりの天の下
萬神殿の中にして
香骨眠る — 幸あれよ。

南歐の詩人と藝術家

二十四番の春の華
 東亞の曆に呼ぶ如く、
 ルネイッサンス一代の
 衆芳競ひて目を奪ひ、
 アイキャンゼルの群に似る
 チチアノ、コレヂオ、チントレト、

皆イタリヤの名の上に千秋の光瀝ぐ見よ。
 妙音の群ペトラルカ、又タッソウとアリオスト、
 メタスカイシオ、ゴルドウニ、アルフェリ、モン
 チ、ホスコロウ、
 近くは薄命のレオバルデイ、更にキアリニ、カ
 ルドッチ、
 天上つらなる諸星に似たり。

ガブリエレ・ダヌンチオ

天その邦に幸ひし、
超人の群巨匠の群
あのく飾る一代の
文化の誇香は高く、
遠く千歳の後かほる、
其ほまれある傳統の

桂の緑、南歐の
かほり、ミューズの恩寵の
豊けきガブリエレ・ダヌンチオ、
半生の詩名標渺の
雲を傳へて、東海の
空に響けり、——オリエント
こゝにも熱き血の潮、
大いなる物高き物いみじき物に
あこがる、青春の聲断え果てじ。

時は風塵のあれ狂ひ、
花を啣める青鸞の
翼しばらく下界にたれ、
祖國の民の胸の琴
震ふしらべに鋼鐵の
絃を弾ずる時にして、
君勳業をアドリヤの
岸の彼方のフィウメの地、
陣雲の上劍光の

閃しめす雄々しさや、
十二の銀箏花を歌ひ
三千の金甲葡萄に酔ふ、
其も人生のおほいなる
生ける詩、君にふさはしき。
嗚呼「シムボリスト」か、「デカタン」か、
四十年前「チュウトン」の
馬蹄の下に荒らされし

バリ満城の恨呑める
沈淪の時代——天に翔けり
理想逐ふべき靈の翼
垂れて現實の享樂に
醉生夢死の目を送る、
例へばグリース末世の詞藻、
あるひは東方十六の
胡人種あらびし世の亂、
道窮れば竹林の

中に身を避け世を逃れ
世を嘲りし高踏の派か。
時は廻り世は轉じ
チユウトン敗れてラテンの光
正に再びかゞやきて
戦亂の餘燼消えん後
桃李三千あらたなる
春を再び迎ふべく
雷霆の響、海潮の音

懐を放ちて飛び来るや、
 薫ずる翼ひらき延して
 花は文章を照らすべき
 三春の盛遠くとも、
 扶桑の民に心あり、
 血あり、情あり、南歐の
 ラテンの精華東西の
 文化の道をつなぐべく、
 虚空をわたる三千里、

高く四海に呼ばんはたそや。
 あゝ天才に老あらし、
 錦囊の上、黄金の
 線に鴛鴦をつゐる如く、
 更に詩情を富ましむる
 君靈妙の想湧きて、
 わがオーリエント日出づる處
 天の一方に目をきわめ

生ける英雄の詩歌として
飛び来るあとに感激の
脈搏高く打たであらめや。

オクシデントはたオリエント、
光を結び香をあはせ、

坤球一箇黄金の

鎖にまよふ愛と愛、

太平洋二洋の潮

等しく花を泛べ去り、
へだてぬ空に浄界の
いにしへの夢、靈鳥の
百千の群舞ふ如く、
平和、恩寵、祝福の
標象の船飛ばん時、
その時待てる憧憬の
思につける一小詩。

天馬の道に終

「天馬の道」に註

8 アルコック、ホーカア、R三十四、

大西洋を横断して初めて成功したのはアルコック氏である
此若き成功者は不幸にも其後飛行の際惨死した。

ホーカア氏は其れに先だちて殆んど成功せんとして僅かの
着陸前に海に墜ち救はれた。

R三十四號は飛行船として大西洋横断に成功した最初のも
のである。英人は之等の人々皆其同族人種なるを見て狂ふ
ばかりに喜んだ。

14 ポーロ(マルコ)コロムバス(クリストファ)

マルコポーロ東洋に來り元朝忽必烈に仕へた。コロムバスの遠航はマルコポーロの跡に刺戟されたとの事。

14 世界の霸王、心靈の霸王

ローマの世界征服また中世ローマ法王の宗教界に君臨した
こと。

16 オリエント

Ex Oriente Lux(光は東より)

著者はオリエントといふ語のいかにも好調なのを好く。
オクシデント(西)の語も同じくよろしい。

16 名エレン、

伊太利の畫工ギド、レニの筆曙の女神(オーロラ)の名高き壁畫(天井の壁畫)がローマにある。

18 エニスの公子

即 マルコ、ポーロ

22 詩美の國

古のグレイス國

23 イサス、アルベラ云々

アレキサンダア大王がペルシャ軍を敗りし戰場。其後軍を進めて印度に入つた、インダス、オクザスのほとりまで進みし

23 脂粉三千

後兵卒が前進を拒むので退陣した。

アレキサンダア大王ペルシャを破り其皇宮に入り皇女を納れて妃とした。

24 妖婦の聲

美人タイスの言に従ひ酔狂のアレキサンダア火を放ちてパリスの大宮殿を焚いた。恰も頂羽が阿房宮を焚いたやうに。

24 詩聖

ホーマアの詩巻をアレキサンダア常に陣中に携へた。

24 オリインボスの十二神

ギリイヌの美術家がオリインボス山上に住める神々を彫刻した其影響はアレキサンダアの印度征討の結果から東洋に及むだこと夥しい。

26 哀蟬の曲、秋風の歌

共に漢の孝武帝の作、一左を『古詩賞拆』の註解から抜く。王子年拾遺記に曰ふ。

『漢の武帝李夫人を懐ふてまた得べからず、時に昆靈の池を穿ち翔禽の舟を泛べ帝自ら歌曲を作り女伶をして之を歌はしむ、時に日すでに西に落ち涼風水を激す、女伶の歌聲甚だ適し、

因て落葉哀蟬の曲を賦して曰ふ。

「羅袂兮無聲。玉墀兮塵生。虛房冷而寂寞。落葉依乎重扃。望彼美

之女兮。安得感余心之未寧。

秋風辭は「秋風起りて白雲飛び、草木黃落して雁南に歸る」に初まり「歡樂極まりて哀情多し、少壯幾時ぞ老を奈何」に終る有名な歌である。

26 蠻族次第に西に馳せ

匈奴武帝の遠征軍に逐はれて次第に西に去つた、其の結果所謂民族大移轉とローマの瓦解とを來した。

31 半島イベリヤ

スペイン及びポルトガル

32 老雄の使

伊達政宗　ローマに使者一團を送つた。支倉常長は其長であつた。

33 フイリツブ、フランソア

支倉がローマ法王より賜はりし名——支倉の畫像今に伊達家に保存せられる、頗る立派の作である、勿論當時のイタリヤの名工のであらう。

34 瓊の浦

長崎港

34 紅毛の人

和蘭人

34 南洋の天領

スマトラ、ボルネオ、ジャワ等當時皆和蘭等に掠められた。

37 ビグミイの國

ビグミイは侏儒、曰ふ迄もなく日露戦争以前の日本は歐米の人士の殆んど度外視したものであった。

39 ドナウの帝城

キーン市、—ダヌンチオ飛行機上よりこの市に數萬の檄文を投下した。

47 北冥の巨魚

莊子の卷頭にある話

51 天馬の道に

本篇の題名はこれから取る、但し此天馬は支那の詩に曰ふ天馬では無い(それは只駿馬のことである)グレイスの神話にある空飛ぶペガサスを指すのである。

55 フルトン

蒸気船成就して初めて大西洋を航せんとした時學者も俗人も一齊に嘲弄して空想の甚しいものと笑つた。或學者は曰ふた。「絶妙の工夫だ、しかし海にどうして路を作るのだらう」

59 クトノス、メン、アイヌ、テールロロン、ヘーコメン、ペドン、

グレイスの大悲劇家エスキュラスの傑作「プロメイトイスの繫縛」劈頭の句「大地の遙き遙き郷にいたりぬ」

59 ハルン

東京の文科大學に英文學を講じて我々を教へられた小泉八雲先生の原名、——先生の著書は（日本を寫されたのが大部分）盛、歐米に行はれる、そして修養ある歐米人士が日本を愛し日本を研め日本に來訪するのに與つて非常に力がある、日本國民は先生の名に對して毎に感謝を捧げねばならぬ。

63 メシナ、ナポリ

伊太利の南部、ナポリ以南メシナ及びシ、リイにわたりて風景尤も美しい。

63 タオルミナ

シシリイ島の南岸タオルミナは昔のマグナグレシヤ即グリスの植民地であつた。當時の劇場のあと今も残る、エトナの山を仰ぎ藍光の海に臨んで絶佳の名勝地、歐洲の畫工は大概こゝを巡禮的に音づれる、著者の「東海遊子吟」の中こゝを詠じた一長篇がある。

65 ラゴ、マチョーレ

伊太利北部の名高き湖

65 山は黄金の名に出で、

金華山、——著者は天下の山水癖ある人々に金華山の來訪を切に勧めたい、其頂上の景及び頂上より燈臺及び海岸を一週する途上の景は雄大といはうか豪壯と曰はうか奇拔といはうか殆んど形容の辭句がない。

69 チチアノウ

即ちチチアノウ、エツキオ(英語讀みにはチチアン)ニス派の首領、色彩の豊麗はラファエルも及ばぬと曰はれた、恰度百歳で逝いた。(一四七七——一五七六)

70 邪神雌伏の圖

71 二十五菩薩來迎圖

北齋八十五歳の筆、向島牛御前の神社の拜殿にある、筆力の豪健なること青年時代にも優りて驚嘆すべき極みである(横山健堂君の論文より)

72 チマブエ、チヨツト

チマブエ(ジオーバンニ)一二四〇—一三〇二、フロレンスの名工にて所謂フロレンス派を起した運動の先驅者、彼の壁

高野山所藏國寶たる本圖は慧心僧都の筆と傳へられた、イタリヤ全盛時代の傑作に比すべきものと或る鑑賞家は著者に教へた。

畫は頗る美はしい。
デヨットは畫家彫刻家建築家を兼ねた名工、前者の高弟であつた(一二七六一一三三六)慧心僧都は(九四二一一〇一七)

88 ゴンクール

佛蘭士の小説家並に批評家、日本の繪畫を西洋に紹介した功は重に彼に歸するであらう。

74 シヤバンヌ、モロウ、

ンヤバンヌ(一八二四—一八九八)

モロウ(一八二六一一八九八)

前者の傑作はバンテオンの壁畫等、後者の殆んど八千點の作

品は彼が巴里市に寄贈したモロウ美術館にある、兩者共に東洋美術の影響を受けた。

81 空に横ふ一赤幟

一面異斯爲人、心異斯爲文、横空一赤幟、始足張吾軍、袁子才讀書の

詩

81 鼎が浦

小山東助君は陸前氣仙沼の人、鼎が浦は同所の住名である、

88 絹張山

鎌倉の絹張山にむかし頼朝錦繡を張りて政子を慰めたといふ故傳である、

92 薤露の歌(漢代の詩)

「薤上の露何ぞかわき易き露かわけども明朝更にまた落つ、人死して一たび去らば何の時か歸らん」

92 五稜の衣

「同學の少年多くは賤しからず五稜の衣馬自ら輕肥(杜甫)」

93 マチイニ

伊太利の愛國者、豫言的革命者、文豪、彼は熱烈の信仰を有した。本篇の後段にもマチイニを讀してゐる。

95 眞島博士の愛兒

東北帝國大學は學者の淵藪として世界の學界に知られてゐる。

118 ヒンデンブルグ巨像のほまれ

眞島博士は其理學部の教授で漆の研究に關して學士會院賞を受けた、同君の愛兒實君は珍らしく伶俐な子であつたが、ヘルニアの手術の結果惜しくも逝いた。博士及び令夫人が今日信仰深きクリスチャンとなつたのは實君の平素の言行と末期に感動した結果であるといふ。

獨逸の連勝時代國民の熱情はヒンデンブルグの木製巨像を立てた、今は之を破壊したそらだ。

122 ABCは何の意か

America, Britain, China

133 隨園の嘆

「米貴安所窮、年々買如珠」小倉山房集卷五

126 サイレンの聲

海中の妖女サイレンの眩惑の歌聲之を聞くものをして恍惚
たらしめ舟を危岩に碎けしめ水夫を悉く溺れ死なしむ(ホ
ーマアの「オデッセイ」中にある話)

126 皆ブルジョアの幻影

マルクス一派の唯物論者は「神、人道等は皆中産階級の胸中に
湧く幻影だ」と曰ふ。著者はこゝにマルクスの經濟、財政、社
會、及び政治論に付いては何も日はぬ、されど彼の唯物論無神

130 アゼンスの聖

論を最も怖るべき戒むべき妄説であると信ずる。

130 ペンシイレ

「思想と行爲、神と人民」これがマチイニの標語であつた「思想と
行爲」といふ題名の雑誌を刊行したこともあつた。

131 其心臓を開き見よ

マチイニ自らの言「わが心臓を開き見よ、イタリヤといふ字が
そこにあらう」

136 頌學

136 文豪

英國の大化學者サア、オリバー、ロッチ、幽界の人との交通を説く、

英國の大小説家ジョージ、エルス世界大戦を題目にした小説を書いてる中に曰ふ「在來神學で教へたやうな神は無いわれは有限の神を信ずる」

142 一切の敬を敬せむ

著者のモットウである、諸宗教の信徒熱心の餘かは知らねど「基督退治」とか「佛敎亡國」とか互に誹り合ふを著者は最も苦々しく最も痛々しく感ずる者である。

143 八萬四千鳳毛に非ず

碧巖にいふ「八萬四千鳳毛に非ず、三十三人虎穴を探る」

146 今わが前に披かる

著者所藏の紺紙金泥の金剛經はむかし某大藩の後室が逝きし夫君追善のため寫したものと箱書がある。

154 常不輕の功德

法華經「常不輕菩薩品」あらゆる、誹謗冷笑を顧みずあらゆる人に作禮して「我れ爾を輕んぜず爾當に佛と成るべし」と曰ひ従つて常不輕と呼ばれた人が此功德により後ち自らも作佛した、それが即ち釋迦如來の前身である云々。

157

ホモイウーシオン、ホモウーシオン

中古キリスト教會を分離せしめた争論、キリストは神と同じ質か、等しき質か云々、即所謂「同質論」「等質論」の争。

158

アメロンゲンにすくまれる

そのむかしキルヘルム大に黃禍説を唱へ、自ら歐洲諸國民聯合してアジアの異教徒征伐に向ふ畫をさへ書いて之を公にした。

162

顧みれば

八十華嚴の卷七「世界成就品」

163

正法諍る極惡人

167

歌ふミニオン

同經卷二十七「十廻向品」

ゲエテの「キルヘルム、マイスタア」中にある有名のイタリヤ懷郷歌。

チトロローネン、オランゲン、ミルテ、ロルピイレわざとゲエテの原語をこゝに用ゐた。

168

サンタ、クローチエ

聖十字院、フロレンスの名刹、こゝにイタリヤの諸の偉人の墓があるダンテの墓はラベンナにあるがこの寺の中に彼の紀念像がある。

177 オレリアス

マアカス、アントニナス、オレリアス羅馬の聖人皇帝(一二一
一八〇)

「異教並に基督教のいづれの帝王も此君に優る聖徳がない」と
迄曰はれた帝王、ストイク派の哲人「冥想録」を書いた。

177 宸濠の亂

宸濠は明の皇族、賢夫人の諫を聴かずして謀反し、王陽明に平
げられた。

180 青蓮

李太白別號を青蓮と曰ふ、五十餘篇の「古風」は彼の一代の本領

183 西に光蔽ふ

だろら。

勿論チャイルス氏(英)またグルーベ氏(獨)の支那文學史中に李
杜の名と一二の詩は引かれてる、しかし一般の歐米人は此二
大詩人の天才を夢にも知るまい。

185 カルララの山

大理石の山、是山より切り出した石でミケランジェロはモー
ゼスの巨像等を作った。

186 アテイネイ

パラスアテーネイ即ミネルバ女神、金甲を着て生れ出でた

← 註 に 道 の 馬 天 ←

188 萬神堂

と傳説さるる、生れながらの完成の譬喩になる。

189 ローマのパンテオンにラファエルの墓がある。

189 アイキヤンゼル

天使の長

189 チチアノ、コレジオ、チントレト

皆流芳百代の名匠

190 ペトラルカ

以下皆イタリヤの大詩人

(了り)

大正九年四月十七日印刷
大正九年四月二十日發行

(天馬の道に 奥付)

定價金壹圓四拾錢

著者 土井 林 吉

發行者 株式會社 博文館

右代表者 取締役社長 大橋 進 一

印刷者 青柳 十一郎

印刷所 株式會社 秀英舎第一工場



不許複製

發行所

東京市日本橋區
本石町三丁目十六番地

株式會社 博文館

振替貯金口座東京二四〇番

土井晚翠君著

(株式博文館發行)

晚翠詩集

〇〇〇 三六版洋裝函入美本
紙數五百九十餘頁

正價金壹圓六拾錢

送料金八錢

「暮鐘」「星落秋風五丈原」「黑龍江上の悲劇」等人口に膾炙せられ殆んど國文學上のクラシックたるもの此集中に在り、「セイヌ江上の別離」「カムパニヤの懷古」「南歐メシナの詠懷」等著者の特色を發揮したる此集に在り、雄大壯麗、天風海濤の韻は、茲に始めて讀者に供せらる。

文學博士 姉崎正治君編

正價一圓八十錢

文は人なり

全四六册

内容
第一期 憧憬時代
第二期 自信の時代
第三期 煩悶の時代
第四期 信仰の時代

附録
性格の
高山樗牛

一代の文豪として幾多の憧憬者崇拜者を有する樗牛の遺稿中から其粹のものを採り、そのものをもつて、更に新版に改めた日蓮關係の文章や、樗牛嘲風の往復した書翰を新たに増加してある。

株式博文館

厨川白村共編
細田枯萍

趣味の文から

正價壹圓拾八錢
送料八錢

警拔な文章、多感な思想、殊に著者獨特の境地ともいふべき「女の日記」「壁訴訟」等は巧に女子に扮して其性を掩ひしもの由來性を移して斯く成功したるは妙し、眞個現代文壇の一異彩たり

文學博士
萩野由之著

史話と文話

正價壹圓八拾錢
送料十二錢

博士が吾が國民一般に國史國文の趣味を鼓吹すべく叙述せられたるものにして、日本歴史上の史實と文事に關する所説五十篇を収む史論あり隨筆あり月旦あり威なこれ金玉の名篇歴史研究者の資料なり

天地有情

袖珍形 洋裝並製
定價五拾錢
送料四錢

文士 井晚翠君著

峨々の山、洋々の水、以て晚翠君の詩を評すべし、此編は實に君が今日迄の吟哦を録したるものにして、新體詩中別に一旗色を樹立するもの、詞華爛漫誠に詩壇の光輝たるに背かず詩と愛讀を玉へ。

大町桂月君著
美文韻
黃菊白菊

正價六十錢
送料六錢

大和田建樹君著
散文韻
雪月花

正價七十五錢
送料六錢

株式會社 博文館

